

一般財団法人

博物館相当施設

旭川

あさひかわ

兵村

へいそん

記

き

念

ねん

館

かん

資料説明

し

りょう

せつ

めい



に　　じ　　め　　に

当館は大半の経費を、地元東旭川の住民の寄付金によるほかに、北海道・旭川市・日本自転車振興会等からの補助金によつて建設したものです。

昭和五十七年新（現）館の開設以来、館長あるいは理事長が説明に当たってきましたが、これの成文を望む方が多いので解説文をつくりました。

観覧者の中には急いでサツと見る人、やや落ち着いて見る人、また中には心で味わつて観る人と色々おられますが、そのいづれにも満足のいく説明は困難です。

この説明文の中でゴシック活字の部分は急ぐ方の主要資料に限った説明になっていますが、普通活字部分を含めると小一時間もかかります。

願わくは、二度三度と脚を運ばれてジツクリと資料と対面し、今は亡き屯田兵や開拓者と心の対話を味わつて頂きたいものです。

こゝを見て初めて

北海道がわかった

横浜市　ＹＴ生

令和七年六月

一般財団法人 博物館相当施設
旭川兵村記念館 理事長

まる　　やま　　こう　　いち
円　　山　　宏　　一

もくじ

「屯田兵について」

1

兵屋

2

開墾、農機具

3

生活用具

6

消防

8

空の四勇

8

行政、教育

14

衣類

15

絵馬

17

掛軸、絵巻

18

歌額

20

絵巻

21

大テーブル

23

「屯田兵について」

旭川兵村記念館は、旭川市が、現在三十四万人もの人々が住む、北海道第二の都市に発展してきた、その母胎となった屯田兵とその家族の、生活用具や農機具などを展示しています。また、旭川屯田兵の子息で、日本の航空史上で勇名な人たちの資料を展示して、ご覧いただいております。

幕末から、明治にかけてのことです。ロシアは、南下政策を取り、樺太を占領して、さらに北海道を手中に収めようとしていました。これを憂いた明治政府は、北海道の防衛と開拓を目的とした屯田兵制度を考えました。屯田兵は、ふだんは開拓と農業に当たり、もし外敵からの侵入があつたときは、北海道を防衛するため兵隊の任務につきます。

明治政府は、明治七年（一八七四）に、屯田兵例則（明治十七年、屯田兵条例に改正）を制定しました。そして、全国から屯田兵とその家族を募集しました。募集に当たって政府は、北海道は遠くて寒いところなので、入植により条件を示しました。第一に、屯田兵として

北海道に入地する家庭には、一戸につき五ヘクタール（五町歩）の土地を支給します。第二に、五七・五平方メートル（十七・五坪）の兵屋をはじめ、農機具や生活用具や寝具まで支給します。第三に、入植から三年間は扶助米、塩菜料まで補助することなどです。

旭川兵村（現東旭川）には、明治二十五年（一八九二）八月に、屯田兵第二大隊の第三中隊と第四中隊の屯田兵と家族が、四百戸二、三三四人が入地しました。練兵場を開設し、戸主の屯田兵は、午前中は軍事訓練を受け、午後は家族とともに農作業に励みました。農作業といっても、入植当時は、周囲は大樹林でした。その樹林を伐採しながら、伐採地を畑にしていきました。

ところが、入植して二年ほどすると、なんとしても米をつくりたいとの熱望から、研究し、努力を重ねて、ついに北海道一の米の多収穫地帯にまでなりました。そのころの屯田兵とその家族の苦労は、なみたいていのものではありませんでした。米の生産がなされるようになって、ようやく生活も向上し、文化活動もおこってきました。

それでは展示物について、くわしい解説をしていきます。

★ 兵屋コーナー



戸井給官

皆さんの向かって右手にあり
ます井戸は、屯
田兵屋のおよそ
八戸に一か所の
割合で、国から
支給されたもの

で、のちに掘りだしたものです。この井戸には、図のよ
うに隣に風呂場が設けられていました。なお、井戸の
たがは腐れがひどく、切れてしまったので新しくしてあ
ります。

正面は、屯田兵が生活をしたり、作業をした屯田兵
屋です。やはり国から支給されたもので、面積は約五十
八平方メートル、畳にして三十五枚くらいの広さです。
これは陸軍省標準型と言って、滝川や旭川、北見付近
の兵屋と、ほとんど同じ規格になっています。

なかにお入りください。下は土間で作業場になってい
て、左手の小上がりが茶の間になっています。切り込ん



所台から板屋兵

だ囲炉裏では大きな薪
を焚いて暖をとったり、
煮炊きをしたりします。
厳しい寒さのなかでの、
天井のない建物です。か
ら、囲炉裏に面した前
は熱くて「台湾」だが、
背中中は寒くて「樺太」
だと、ボヤいたと言わ
れています。

左側の障子の向う側に六畳と、その右奥に四畳半
と畳の二部屋がありますが、六畳間は寝室であり、屯
田兵戸主は満十八歳から二十五歳くらいまでの若者です
から、のちに嫁を迎えることを見込んで四畳半の部屋を
用意したものです。

冬になると氷点下四十度近くにも気温がさがるので、
六畳の寝室に畳を切って掘炬燵を作りました。また、
表の板戸を閉めるとまっ暗になるので、入植して数年
後にガラスが東旭川にもはいってきたので、表側の
板壁を切り抜いて半紙版四枚のガラス窓をつけました。

金突棒は「ふん突き」と
言って、冬中は大便がす
ぐ凍って盛りあがり便器
に届きますので、この
金棒で突き崩しながら春
まで使用したものです。



兵屋の土間

しかし、畳を切るの
も壁を切り抜くのも、
すべて永山の大隊本部
に許可願をだして、許
しをうけてからでな
いと、手を付けるこ
とはできませんでし
た。これは官有物で
国有財産だからです。
出口の右側にトイレ
があります。この



兵屋トイレ付近

★ 開墾、農機具コーナー

右手の壁に写真が三枚掲げてあります。手前が入植
時の密林で隣もなかなか見通せませんでした。次の写真
がもっとも古いもので、立木の切株が人間の背より高い
ことがわかりでしょう。

木の伐採作業は冬に行いますので、深い雪が解けると
切株がこんなに高くのこるわけです。この旭川兵村はと
くに大密林地帯で、「一本伐ればやっと一本分の空が見
えた」と言われていて、伐採にはずいぶん苦労したよう
です。伐採が進んでも地面は一帯の熊笹です。こ
れを笹刈鎌で刈りとったのちには、必ず蕎麦をまきます。
蕎麦は笹の根を早くからす特性を持っていますので、みな
この順序で耕作を進めました。

この辺は湿地帯ですから、木は楡かヤチダモですが、
薪にして売る方法もなく一か所に積みあげて、乾いた笹
をかぶせて火を付けて、毎日毎日昼夜となく、燃やし続
けたと言います。

つぎの写真は、かなり水田化が普及したころのもので

すが、水田のなかに切株ののこっている有様がわかりま
す。前の写真からみて十年以上もたっているでしょう。



左が窓鍬(刃がね付)、右が官給の唐鍬

はなく、昼休みに鍬から手のひらを離すときは、下水に
鍬と手を一緒に浸して、しばらく潤してから、そつと
柄から手のひらを離さないで、血豆が破れて血だらけに
なりました。午後に鍬を使えなくなるので、注意して使
用したと言われている。

つぎは押切です。この柄の裏をみてください。材質の

下の台に窓鍬があ

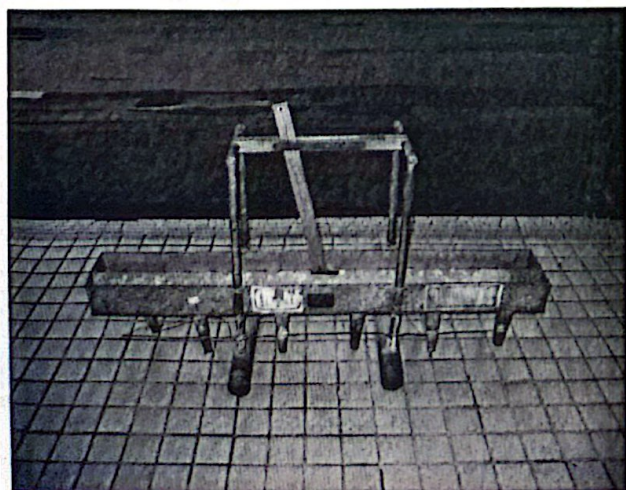
ります。これは
官給品ではなく個
人で買いいれたもの
ですが、巾が広いの
で一日に一アール
(一反)も起こした
ので、「一反鍬」と
よばれました。

しかし、これを使
いこなすのは容易で

堅いタモ材ですが、柄が指なりに摩り減ってしまってい
ます。屯田兵親子が二代にわたり八十年間も愛用したも
のです。

屯田兵村は司令部から、南方植物である稲の栽培を
禁止されていましたが、樹林地帯は地味が肥えているの
で、禁を犯してあちこちで稲の試作が行われました。少
ない面積で稲作の栽培に成功する者が現われました。明
治二十七年(一八九四)ころから、急速に水田が普及
し、既成事実をつくりあげていき、ついに司令部も黙認
しなければならなくなっていました。

しかし、本州のよ
うに水苗をたててか
ら移植したのでは、
生長がとまって秋の
登熟に間に合わない
ので、籾のまままき
直播方式になりました。
た。これもいちい
ち、手でまいたので
は時間がかかり、一



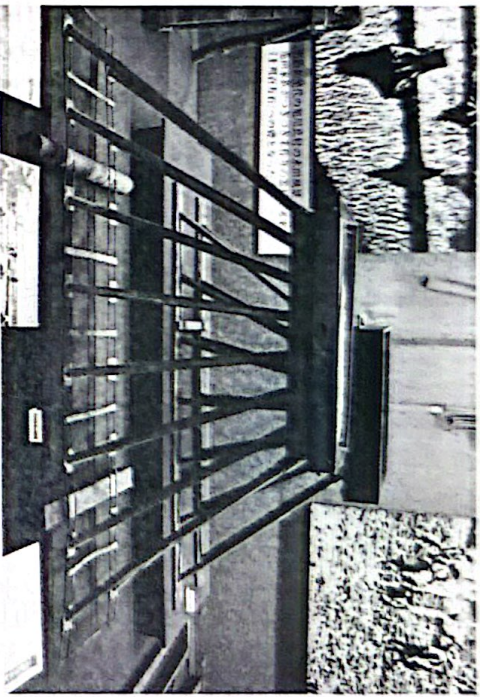
寺門千我吉のネコ足

・五ヶクタールをまくのに十数日を要しました。まき終

わるころには、先に
まいた田の苗は数セ
ンチに伸びて時間差
がひどくて困りまし
た。

その当時、屯田兵
の父親の末武安
次郎さんが、板や
竹筒を使って粃播機
を考案しましたが、
これはどうしてもう
まくいかず、板金屋

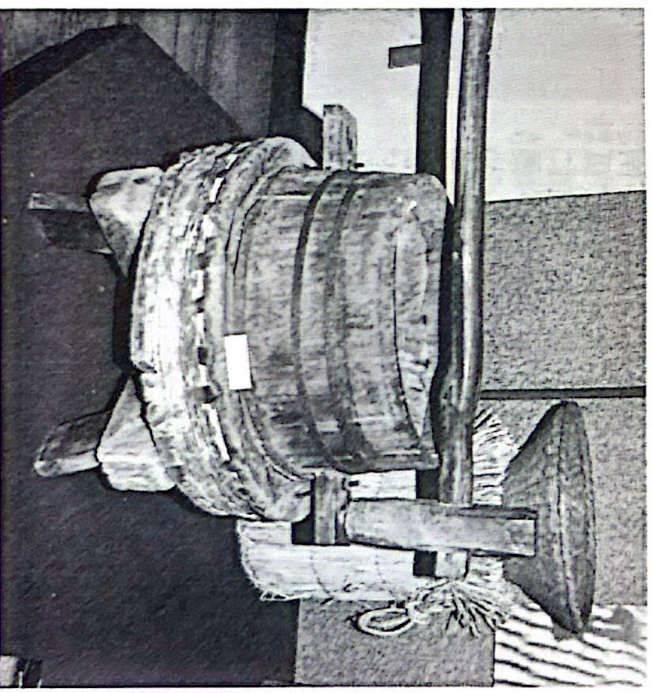
の黒田梅太郎さんと共同で開発したものが成功しまし
た。この粃播機を黒田式として、特許を受け黒田さんは
大儲けをしました。末武さんは、考案に払った犠牲を
一向に気にしなかったと言われます。
つぎは脱穀ですが、千歯を使いました、秋になると千
齒職人がまわってきては、料金をとって歯の締め直し
を行ったそうです。



末武安次郎のタコ足

つぎは粃すりですが、この土臼に六人がかりで夜遅く

まで作業
をして、
一日に五、
六俵（三
〇〇から
三六〇キ
ログラ
ム）しか
すれなか
ったそう
です。し
かも臼に二回



粃すりの土臼（どうす）

くぐさないと、きれいにむけなかったと言います。
この苦勞を見ていた旭川屯田家族の吉峰吉次郎（香川
県出身）さんが馬力による農機具「馬回し動力機」（唐
傘）を考案します。これは馬が動力源になるもので、人
より三倍も四倍も能率が上がりました。たちまち全道に
拡がり、北海道の農業に一大功績を残しました。

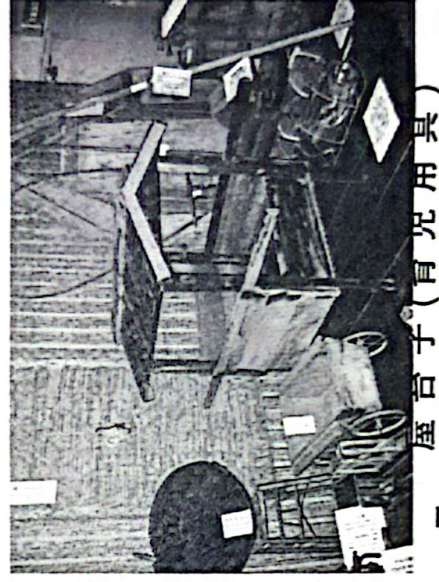
★ 生活用具コーナー

ここに、やすと網があります。旭川中心の上川盆地は、北海道の内陸部にあり海岸に接していないため、屯田兵は干魚をおおくだべていました。ですが年に一度だけ、魚の方からきてくれる季節があります。それは秋です。鮭が産卵のためこの川にも、あふれるように遡上してきたそうです。これをついて塩漬やぬか漬にして、冬の貯蔵食品として珍重しました。

この三角板(写真)は、馬力用の除雪機です。戦前の農家はすべて馬を飼っていましたので、雪が積もると、決められた当番がこのラッセルを馬にひかせて、町や学校への道路の除雪をしました。

つぎにこれを「屋台子」と言います。乳飲児を家にのこしておくわけにはいけませんので、これに入れて夫婦が、前後の取っ手を持ちあげて田の畦に置き、子どもが泣きだすと、たんぼから走り寄って乳を飲ませました。また、昼食時はここを囲んで休息をしました。

つぎの乳母車は、金持ちの屯田兵の家にあつたものですが、一般には使われていません。タイヤもなく飾りも



屋台子(育児用具)

南瓜に黍や豆などを混ぜた雑炊が常食でした。

あるとき、臨月のおかみさんがお腹に雑巾を当て、この大鍋をおろそうと力んだときに、シヨックで男の子を二度も流産しました。三度目の妊娠からは、この鍋おろしを免除され、三人目に生まれたのがもとの屯田会長小山竹さんです。

ないのですが、これが当時の贅沢品だったわけです。

つぎは「流産鍋」と言われました。これは雑炊鍋です。屯田兵の家庭で白米のご飯を食べられるのはお正月とお盆の

二回だけで、ふだんは馬鈴薯(ごしよういも)に大麦とか



流産鍋

つぎに、反対側をみてください。入地当時は野生の桑が沢山繁っていたので、屯田本部は養蚕を奨励し、

北海道庁から技師を招いて講習会を開いたりして

います。一方で水田が普及すると、繁忙期が重なるので、どちらか一方を見合わせなければなら

なくなり、養蚕は中止となりました。

さてこの機械は、明治三十一・二年に福島県から

現在の米原・瑞穂一带に入地した福島団体会員が持参した

ものです。

つぎはもとに戻って上をみてください。小さな提灯

が二つありますが、小田原提灯です。外出して夜遅くなるときは、これとローソクを懐に入れて帰りの夜道を照らしながら帰宅したものです。

つぎは木の枝で作った爐鉤です。これは屯田兵以外の



一般移住者の

ものです、

拝み小屋のなかで生木を炊いて、煮物を

するとき使用したもので、

まん中に鍋の吊手の摩り減った跡がみえ

ます。

つぎは、

備後尾道産の酢の徳利です。屯田生活では調味料と言

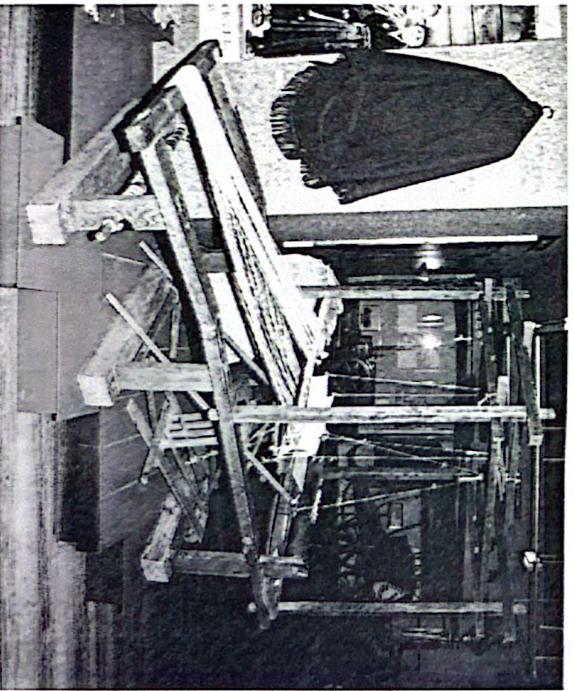
えば味噌と醤油しかありませんでしたが、日露戦争後の好景気で生活も向上し、酢が東旭川でも用いられるよ

うになったようです。

つぎに茶釜があります。口にひびが入ったものを鑄掛屋が真鍮蝋着で修理したものです。当時、鑄掛屋が東

旭川にもまわっていました。

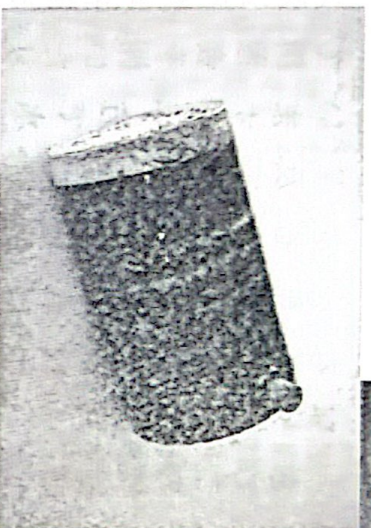
つぎは下駄スケートで「ゲロリ」とも言いますが、踏



はた織り機



み固めた堅い雪の上を滑
つたものです。ところ
が、氷の上は横滑り
して使えません。
台の端に陶器の湯た
んぽがあります。口に
木栓を差してあります
が、これに昆布を巻き



陶器製湯たんぽ

★ 消防コーナース。

つけて差せば昆布が潤んで
ふくれ、湯が漏れなくなる
わけです。当時はキルクと
いうものがなかったので、
そのころの生活の知恵で

ここは消防のコーナースです。奥に屋根のついた柱が

ありますが、これは非常通報用の「板木」で、もとは木の厚板をさげてあって、火災や水害危急のときに木槌でこれを打ち鳴らして人を集めるためのものです。木の板が腐ったので鉄板をつるしてありますが、現在はサイルンを使っています。

つぎは明治四十四年（一九一）村役場に備え付けた腕用消防ポンプで、当時はこんな簡単な機械でも五百円もしたのですから機械類は高価なものでした。

つぎは半鐘が三つあります、街角の要所要所に火の見櫓が立っていました。そこにこれがつるしてあって、緊急非常のときにこの鐘を打ち鳴らして人を集めた警報器です。奥にかかっているのは消防団員の着た「刺し子」です。これを着込んで水をかぶり火のなかにはいり、逃げ遅れた人を救い出したり、消火作業にあたる服装です。

★ 空の四勇コーナース

つぎのコーナースは、東旭川出身の空の四勇のコーナース



赤石久吉

です。右端の写眞は海軍少佐赤石久吉さんです。赤石さんは屯田兵の弟に生まれ、小学校から成績抜群で旧制の旭川中学校をトップ

の成績で卒業しました。さらに、海軍兵学校も首席で卒業し、恩賜の銀時計をもらいました。選ばれて航空機の研究にあたり、操縦はもちろのこと、エンジンの構造までも全般にわたってマスターした、ただ一人の技術者で、海軍の至宝と言われていました。また、絹張りの飛行艇で九州佐世保から横須賀の追浜まで、一、一八五キロを十一時間三十分で無着陸飛行を達成し、世間をアツと言わせた勇士です。

この原稿用紙綴に、そのときの様子を手記としてこのしています。「オシッコをしたら全部顔にかかった」とか。「乾パンを食べようとしたら唾がでないので飲み込めなかった」とか。「途中でエンジンから黒煙がでたので、もう駄目かと思っていたがもとに戻っていた」などと、述べております。しかも無事に着水して壮挙をな

しとげました。

大正十五年（一九二六）初めて国産のジエラルミン飛行艇KB型機が完成し、この試験飛行を赤石さんは命ぜられました。飛行の予定日になりましたが、まだエンジンに不安がのこっていたので、赤石さんは一日延期願いを出しましたが、それも許されないうで試験飛行を試みました。心配していましたが、エンジントラブルで誰もみ状態となり墜落し水没してしまいました。ときに三月二十二日で、赤石さんは三十四歳の若さでした。これこそこんにちの、航空技術開発の尊い人柱と云うことができます。

このときの試験飛行には、隊長と操縦士の赤石さんと機関士と通信士の四人が乗り組みました。第一日目の試験飛行はうまくいったのですが、二日目の性能試験のとき、赤石さんは「いま一つエンジンに不安があるので、もう一日待つてエンジンを調整したい」と、隊長に申しましたが、隊長は「昨日は快調だったではないか、赤石心配ない乗れ乗れ」と強く促したので、ことわりきれず発進したのでした。

この殉職を聞いた、日露戦争の連合司令官で海軍の

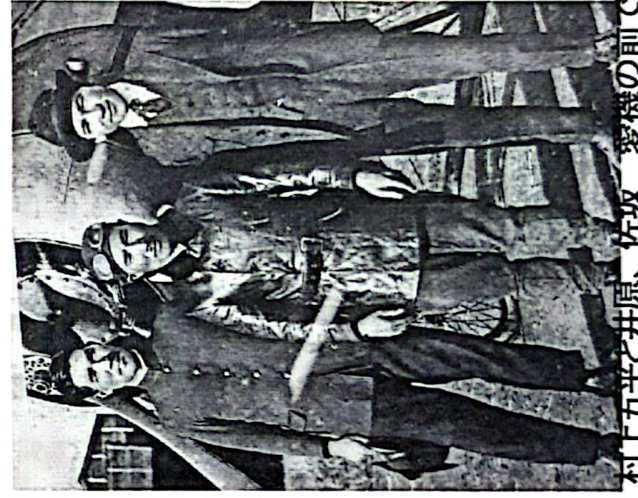
父と仰がれた東郷平八郎元帥から、遺族宛に「壮烈」の揮毫がおくられてきました。また東旭川村当局も感激して、いま動物園のある旭山公園に、東郷元帥の題額の入った海軍少佐赤石久吉さんの碑を建てました。

愛媛県出身の屯田兵村上永太郎さんは商才にすぐれ、兵隊の現役を終えると雑穀肥料商を営んで成功しました。その長女は兵村小町と評判の美女で、夫は香川県から迎えた養子の五平さんです。しかし、奥さんは子どもを二人のこして先立ってしまいました。美人は薄命です。五平さんは悲嘆にくれ、家内のあとを追ってあれこれと考えました。もう命は惜しくないと思つて、もつとも危険な飛行機に挑戦しようと、羽田の玉井飛行研究所に学び免許証を受けました。それが「ケースの中にある53号の免許証です」。

また、五平さんは信用組合から一万五千元を借りて、絹張り飛行機二機を買い、旭川第七師団練兵場で練習を重ね、東旭川屯田練兵場に郷土訪問飛行を計画します。その計画に対し航空士官の小国大尉が「試験飛行場として、練兵場は滑走路が短いので着陸は無理だ」と忠告したのですが、本人は「精神一到何事かならざら

ん」と初志をまげず練習にはげみました。

大正十一年（一九二二）六月に計画は実行され、屯田練兵場に向けてやや急降下で強行着陸し、飛行機は大きく一回バウンドしたために、プロペラ車輪などをいためました。でも本人はかすり傷一つなく数千人の大観衆の中にさつそうと降り立ち、万雷の歓呼に迎えられて目



利上五平と井原、佐坂 愛機の前で

的を達した快男児でした。このとき飛行機の座席には、十文字のシートベルトが着いていたので怪我はありませんでした。

このことによつてシートベルトの安全性が証明されたのです。

五平さんは豪快な人で、羽田に飛行学校を開設する計画を立て、当時政界の重鎮だった大隈重信公に渡りをつけ、陸軍から中古の絹張り飛行機七機の払い下げをう



加藤建夫

け、三菱の倉庫を借りて準備がほとんどととのいました。ところが関東大震災に見舞われ七機の中、六機が津波にさらわれて大計画は挫折してしまいました。五平さんは失意のまま、旭川に戻り平穏な晩年をおくりました。当時はまだ、道路に自動車さえ走っていない時代でした。空を志した冒険家は、民間航空の先駆者でもあり、兵村からでたことは郷土の誇りです。

写真の中に「大鵬」という旗が載っていますが、五平さんの勇気をたたえ、当時の旭川第七師団内野辰次郎中將が揮毫したものです。全勝優勝の記録をもつ横綱の大鵬より四十年も前のことです。

つぎはご承知の方もありましょうが、太平洋戦争（当時は大東亜戦争という）中に隼戦闘機隊長として有名な加藤建夫少将です。

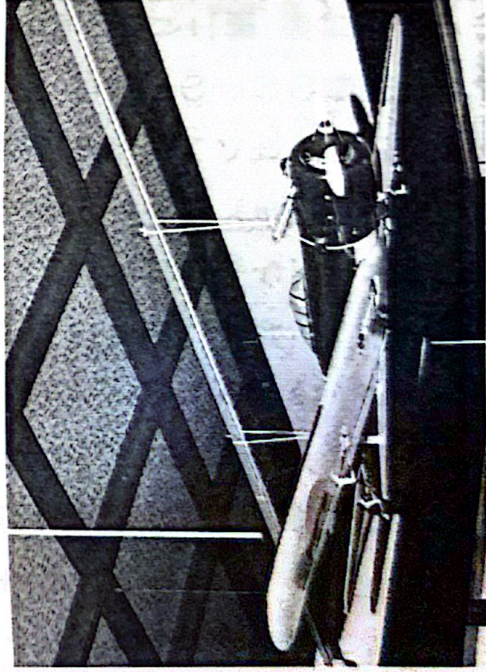
加藤隊長は、わが旭川屯田の軍曹を務めた京都出身者の加藤鉄蔵さんの次男として生まれました。明治三十

六年（一九〇三）九月に納屋の建前の日に生まれたので建夫と名付けられました。少年時代は平凡な人でしたが、運動は万能選手ですごく勤がよかったと言われています。

旧制旭川中学校の三年生を終えて、仙台の陸軍幼年学校を経て士官学校を卒業し、パイロットになりました。これは先に申しあげました海軍少佐赤石久吉さんが、結婚のため帰省したとき、母校の旭川中学校に招かれて軍事講話をしました。

それは「これからは空の時代が必ずやってくる。戦

争も空が舞台になるだろう。空を恐れていては世界に遅れをとることになる」との熱烈な講話でした。この講話を聞いた加藤少年は「同じ村の同じ屯田の家族としての親近感」から強い影響を受け



隼戦闘機・模型(加藤使用時の塗装)

て、パイロットを志したと言われています。また加藤隊長は三重県の明野飛行学校など、各地で教官を務めました。部下をわが子のようにかわいがる人情家でしたが、いざ訓練となると人が変わったように厳格でした。おのれ自身にも極めて厳しく、自分にできない技術は部下に要求しない人でした。あらゆる技能を体当たりでマスターし文字通り率先垂範の人でした。

空中戦で隊長自身も、身の危険にさらしながら空中戦が終わって着地しても、一人ひとりの戦闘について実によくみていて「あの左旋回は早過ぎる。あの反転は危険だ……。」と批評されたそうです。それを聞かされた部下は「驚かされた……隊長の眼は、後ろにもついているのかもしれない」と笑いながら言ったそうです。

また、加藤隊長は、当時司令官だった寺内寿一元帥の随行員として、昭和十四年（一九三九）ドイツ、イタリアを視察しました。たまたまドイツで新鋭機が完成して披露され、加藤さんに「乗ってみませんか」とすすめられました。いつもは控え目な性格の人ですが、飛行機が飯より好きな加藤隊長は早速試乗し、あざやかなアクロバット飛行を試みました。それをみていたドイ

ツ軍パイロットは口々に「日本にもすごいパイロットがいるものだ」と驚かされたそうです。

さらに、加藤隊長はアメリカをも視察し、わが国とアメリカを比べて、あまりにも生産力にくだりのあることに驚いて、帰ってきて参謀本部へ「日本は絶対にアメリカと戦争してはいけない」と強く警告していたそうです。ですがいつとはなしに日本とアメリカの戦争となり、加藤隊長は最前線のビルマ（ミヤンマー）のアキヤブ九十キロ沖合の空中戦で、ベンガル湾に火の玉となって水没されたのです。壮烈そのものの最期でした。ときに四十歳で、中佐でなくなり二階級特進して少将にあげられました。

満州事変のころ、蒋介石の国民政府から依頼を受けて、中国軍のパイロット要員を明野飛行学校に受け入れて加藤隊長が直接指導訓練をしたことがありました。数年後、日華事変となり同隊長も南支方面に出撃して、中国空軍と空中戦を交えなければならず、おそらくは教え子のパイロットを、つぎつぎと撃墜する結果となり悲痛的な気持ちだったそうです。広東に進駐したとき、郊外白雲山にある中国空軍の基地を尋ねては線香を供えて

いたとのことでした。

最後は、屯田兵中野光造さんの三男勝義さんについてですが、勝義さんは旧制旭川中学校で加藤さんと後輩だったそうです。中野さんは旭川中学校を終了すると、旭川米飯第一小学校の代用教員となりましたが、児童に流行歌の「枯れすすき」を教えて首になりました。その



中野勝義

の後法政大学に入學し、学生ストライキを組織するなど、勇敢な暴れん坊だったようです。卒業後、朝日新聞社に入り航空部をつくり、日

本の民間航空の発展につくしました。

戦後民間航空の再開が許可になるとすぐ、国内に東亜航空、沿岸航空、日ペリ航空など多くの航空会社がありました。しかし、乗客も少なく経営困難に陥ってしまい、これらの弱小会社を一つにまとめて、全日本空輸株式会社をスタートさせました。こんにち日本航空と並ぶ会社の基礎をつくったのは、中野勝義さんの不屈

の努力のたまものです。

しかし、昭和三十五年（一九六〇）十勝の国有林に、野ネズミが大発生して食い荒らされたことがあり、空から殺鼠剤をヘリコプター四機でまきました。中野さんはこれを監督するために、軽飛行機に四人で乗って来道しました。惜しいことに、この機が墜落して五十七歳で亡くなりました。当時の北海道知事の町村金五さんが、新得寺境内に「翔鳳」の碑を建てて追悼しました。中野さんは豪気な人で、通産省でも大声で怒鳴ることもあつて、「ライオン」とあだ名がついていたそうです。生きていれば間違いなく通産大臣になったであろうと言われています。

また、この図ではききわけておいて、かゝる給与地

す。

手實似足真似て用をたしたといふ笑しい話もあるほどで、入植し、金話が大言壮語したといふ、通になく、せす。かまには青森県の人と大分県の人とが隣り合つたもの、抽選で割符が渡され、その番号にちかつかつて入地したものに、きた陸上小樽、おいて、いれさ、区、旭川屯田の宅地割図



てですが、西の端の一番から東の端の四五百番まで整理して、屯田兵の第一給与地と一・五へタタールの配置図につい

★行政、教育、コナール

じきは二代目の郵便局です。

学校「旭川尋常高等小学校」の校舎です。

じきは明治三十年（一九〇七）に開校した二代目の小

のモテルになりました。

にきた役場、当時としては超近代建築で近村（八）の市街地（の並みです。じきは正七年（一九一）ま

間×百五十間（となっていました。

タールは図のよう間に五四米、奥行三七三米（三）

か遠すぎて能率があらう。一・五

練兵に通えないうし、ラッパも聞こえません。また、兵屋

ま、道もい原路を大ぎく割、遠い者は

た。な一度に五へタールを区画しなかつたかと言

五へタールの第二給与地は早い者勝ちで支給されまし

・三（一）の五へタールをひらき終ると、

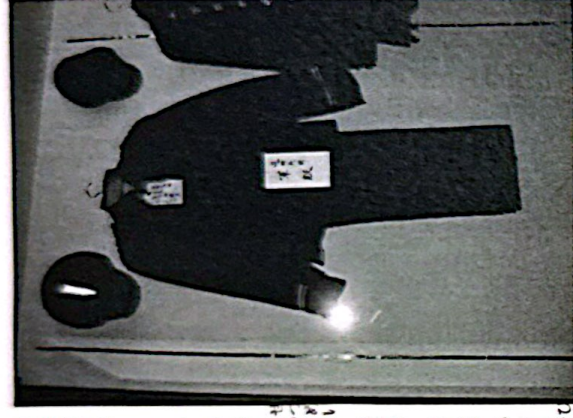
同果人が助け合つて開墾したと言われています。

りしていましたが、給与地は不公平でし

泥炭が混じつていたり、また一部が斜面になつていた

の奥は千差万別で、土地が小川が流れていたり、

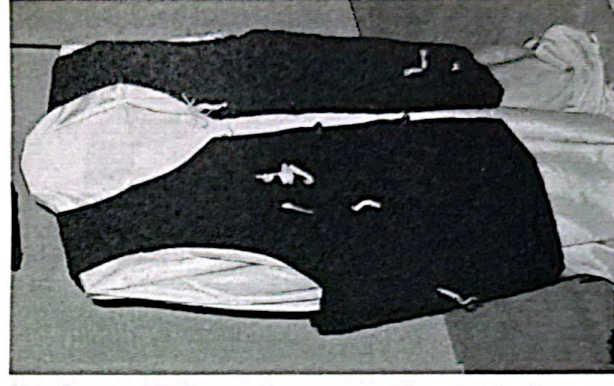
★ 衣類のコーナー



軍服(兵卒用の冬服)

このケースは軍服で、左から兵卒用の冬服、まん中が大隊副官の礼装、奥にあるのは将校用の服です。となりにあるチヨツキは真綿がはいって

産鍋のところで説明しました小山雛助さんが、日露戦争に出征したときに、奥さんが満州は寒いところなので心配して送ったものです。小山さんは北陵で負傷してロシア軍の野戦病院に収容されましたが、ロシア軍は退却するときに、日本人負傷者をつぎつぎと銃剣で刺して殺してしまいました。小山さんもしんがの壁に押しつけられて十七か所も刺されたそうです。ところが、剣の先がまがっていたのと、真綿のチヨツキを着ていたので剣が通らなかったそうです。倒れているところを二時間後に、日本軍に助けられ凱旋することができました。生還した

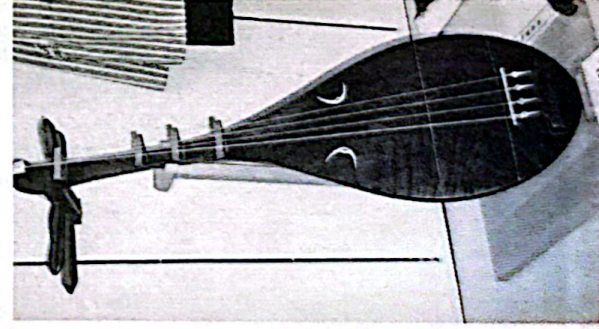


一命を取り止めた

また、村会議員にもなって大活躍をしましたが、これも奥様の愛情の結晶と、真綿のチヨツキのおかげだったのです。

つぎは薩摩琵琶といい、屯田兵制度の廃止後、来村した村医池田政次郎が愛用したものです。

となりは浄瑠璃の道具一式で、繻子の袴は師匠用、麻の袴は弟子用で



村医が使用した薩摩琵琶

す。当兵村には愛媛と香川の両県の出身者が、四十五

おかげで六十ヘクタール(六〇町歩)の土地を営する大地主になりました。

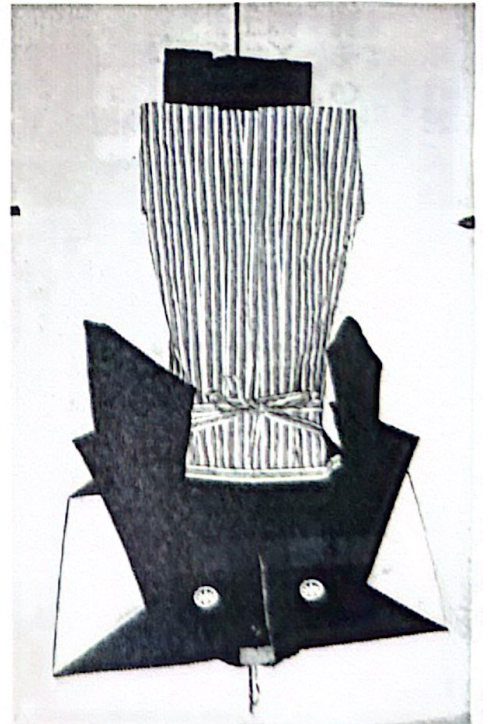
江戸時代の庶民が用いた



屯田時代の花嫁衣装



浄瑠璃師匠用の
袴 (かみしも)



したので、様子がすっきり切れています。

高尾山から持ちてきたもので何十人も人が交代で利用したので、袖に模をつけたところ。これは、江戸時代は庶民には絹物を禁じられていた。

江戸時代は麻でできた左端の衣。た。がかん瑠璃で、いまでも占めたい。

浄瑠璃の見台





★ 絵馬のコーナー

戦勝を祈願した大給馬

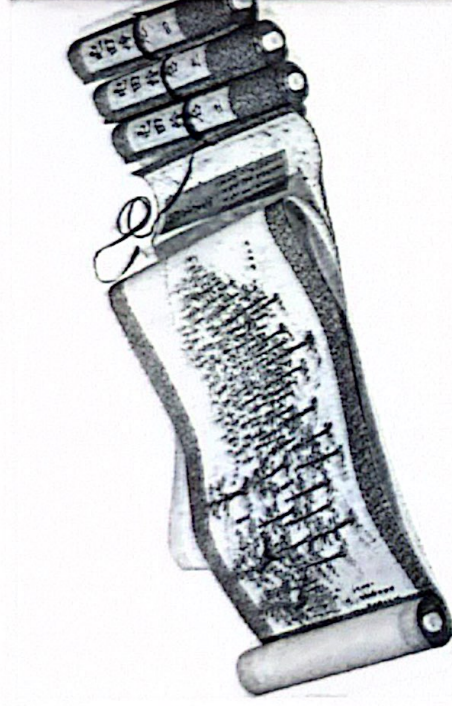


で猛演習を
た。東京市内
出征しまし
団を編成して
て臨時第七師
屯兵をもつ
動員が下
九（五）月三
十八年（一八
兵に明治二
て早々の屯
ます。入地し
が掲げてあり
の二枚の写真
隊と第四中
隊とした第三

右にまわりますと、日清戦争から無事凱旋した第三中

宮大工の森惣太郎が彫つたものです。この小屋は大正六
じぎは小松座という居小屋の看板です。屯田家族で
屯田兵が汗をかきながら大雪山を眺めていてゐるこ
川在住の米の彫刻家で、道展会員の松田さんです。
ました、橋場正一さんの寄贈になるものです。作者は東
兵像「汗」表紙写真（夏）です。当館の初代理事長あり
じぎは兵村記念館のホールとも言える木彫りの屯田
とみることでございます。
り傑作です。日本中どこでも、これだけの絵馬はちよ
武者の表情など筆使いが生き生きといて勢いがあ
歳まで長生きしました。この絵馬は色彩が鮮明であり、
絵馬です。おかげで中野光造さんは元気で凱旋し八十
柴田家を亡くしたとき、勝戦のめでたい出陣式の
加藤清正、福島正則など、固強な家来七人連れて、
が岳の七本槍「有各」です。馬に乗った豊田秀吉が
大阪からとりよせて旭川神社に奉納したものです。
親で、屯田兵中野光造さんが日露戦争の戦勝を祈願し
じぎの大給馬は全日空に勤めていた中野勝義さんの父
をうけました。この写真は東京滞在中の記念写真です。
續けていく最中に驍将となり、六月無事帰郷し驍功行

同県が藍染の名産地であるところから、歌を詠んでこれ



広澤徳治郎の「屯田絵巻」

達者なのと、つぎの青色の掛軸は染抜手拭いなのです。旭川屯田兵の四百戸のなかで、最も数の多い応募者のあつた愛媛県松山市の九十三戸に、ときの勝間田稔県知事が書が

この調査から十九年も経って、やっと明治二十四年（一八九一）に永山に屯田兵第三大隊本部と屯田兵四百戸が入植するのです。なぜこんなに長い年月を要したのかと言いますと、馬車の通れる道路を作るには、莫大な資本と労力を要します。石狩川沿いに旭川まで馬車の通れる道路ができたのは、明治二十二年（一八八九）で、囚人の労働によって開通しました。いまの国道十二号線

を手拭に染めて銭別としておくったものです。すでに故人になられた屯田兵の丹嘉多吉さんが、八十八歳の米寿を祝って表装したものです。

下のケースのなかをみてください。この絵巻物は大部分県中津市出身の屯田軍曹広沢徳治郎さんが、七十歳をすぎ、屯田時代の生活を回想して障子紙に描いたものです。体験者本人が描いた貴重な資料です。なおこの絵の元絵は向こうのケースのなかにあつて、北海道の指定文化財になっています。広沢という人は趣味の広い文化人で、絵画、彫刻、陶芸、茶の湯、生花の心得までにおよび、多種多芸の人でした。ところが開墾は大嫌いで、家族にまかせて悠々自適に思うままに生きた風流人だったのです。「人間は働くばかりが能ではない、須く趣味を楽しむべし」と同志をつのつて「ラカン会」をつくり楽しんだそうです。この会の名は「働かん会」の意味なのです。また村に皇族や偉い人がくるときには、天目茶碗でお茶の給仕をする娘さんに、その作法を教授するのはいつも広沢さんの役でした。

★ 絵巻コナナ

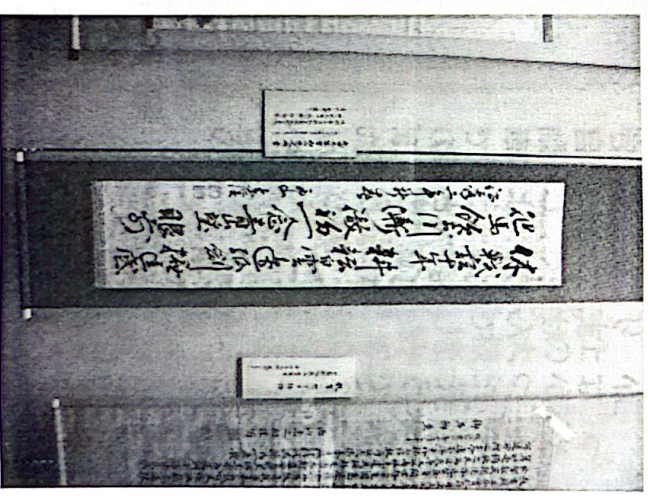
つぎにまた、後ろのケースのなかの油絵をご覧下さい。これは加藤隊長が昭和十七年（一九四二）五月に戦死したので、陸軍省が小樽出身で著名な画家の中村善策に依頼して、同隊長の生まれ育った屯田兵屋と大雪山を描かせた作品です。戦時中は隊長が長く教官をしていた



（中村善策作）三重県明野の陸軍飛行学校の教官室に掲げられていたもので、敗戦のボサクサに紛れていつの間にか東京銀座の画商の手生にわたり、当館に展示を勧められました。将主としてライオンズクラブの有志が寄付金を集めて買い入れ加藤金を贈してくれました。

いのする作品です。

つぎの書二幅は、これも京都出身の屯田兵で、のちに軍曹になった西山忠之助さんの作品です。学識があつて書が達者なので、開拓当初から教員を頼まれ学校に勤務しました。日露戦争の動員で出征し北朝鮮からウラジオストクへ進軍中に講和となり、凱旋の途中腸チフスにかかり九州の大里陸軍病院で病死しました。当年三十四歳の若さでした。夫の凱旋を楽しみに奥さんは、あいさつまわりに紋付き袴に白足袋に扇子下駄まで用意して待っていたのに、その落胆ぶりは慰めの言葉もなかったと言われます。このとき六歳だった長男の勲さんは、おじさんに預けられて苦学力行のち、旭川信用金庫の発展



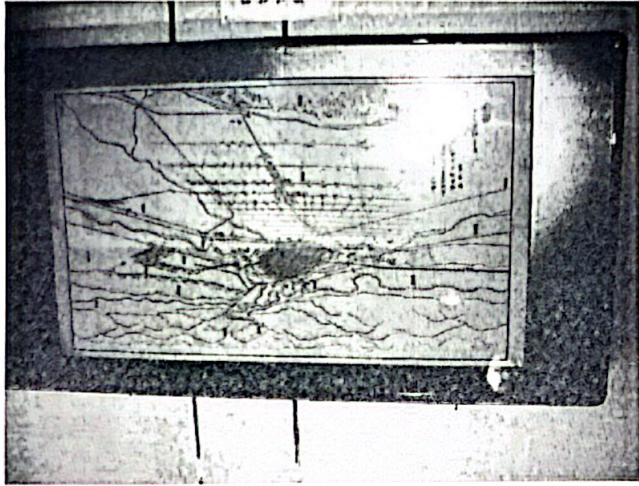
屯田軍曹・西山忠之助の書

大変のどかな冬景色で、隊長や父親鉄蔵さんの温かい人柄に接する思

昭和十

うきは現在みるごとくができてきない日本地図です。

かなったそうです。旭山展望の時間は、わずか三十分しりませんでした。旭山展望の時間がたりずお乗りになかつ練習までしたのですが、これです。青年十人を選んで、頂上まで、驚かすものと、所要や河川道路、村長が参考にと、玉井、仁親王殿下、展望台、旭山公園、数干歩の水田が一望、九三三（一）のものです。九三三（一）のものは昭和六年（作）の鳥瞰図（鳥瞰図）を感して、



昭和六年当時の鳥瞰図

な風景が感じられます。先年中国の要人が観覧にきたと、これをみて「中国人民と屯田兵の連帯を感じた」と、感想をのべて帰りました。

月清明の季節を詠んだ七言絶句です。「一幅の南面のようす。この詩は唐代著名な詩人、杜牧のものではない。書が巧みであり、農民書家として多くの賞をうけて、亀太郎さんが書いたものです。亀太郎さんが旭山と号し、この書は、青森県出身の屯田兵福井永太郎の長男の筆をうけています。

九三三（一）に描いた層雲峡の秋景色大枚屏風一双は、高きだした画人です。最近旧家からきてから、昭和六年（一）を描き、南画を学び、開拓に四十年間専念され、代られた米飯の開拓に入植したと、団長で、二十キロの移住者百五十戸を引率して、（一）からさらに十キロの村長を勤めた人です。屯田兵ではありせんが、福島で桂育と号しました。この作者は東旭川村の第七代目作、つづいて節分の図がありすが、菊田熊之助さんの作

の水に屯田兵の秋の句碑をのこしました。長寿をまつと、同氏は屯田公園に「大雪の念館の建設にも多大の援助をおし、八十七歳の記につくし、二十四年間理事長を勤めました。また、当

二年（一九三七）に発行された雑誌『キング』の付録で、千島列島、樺太、朝鮮、台湾がすべて日本領土だったのです。これは私たちの祖先が、日本列島の安全のために、汗と血と涙で合法的に取得したもので、朝鮮半島は当時の国力を傾けて開発を進め、人材を抜擢し朝鮮人の陸軍中將まででました。

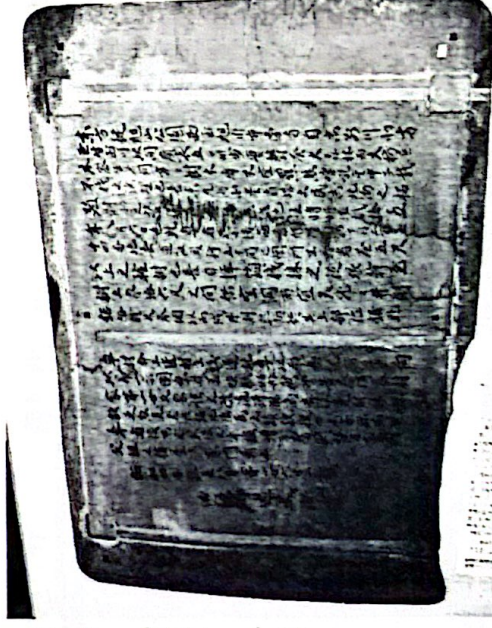
下の化粧まわしは、昭和のはじめ草相撲のさかんな当時、豊岡に住んでいた金岩清進さんが「金の花」の醜名で活躍したころのもので、金岩のお得意先からおくられたものです。

つぎのロッカーには、旭川市指定文化財である屯田中隊記録百四十七冊が保管されています。その一部は平ケースに展示してあります。さきに説明しました屯田絵巻の元絵である原画綴一冊が、同じ市の指定文化財として、このなかに展示してあります。同じ場所にむつかしい表題の冊子があります。これは稼穡表と読みます。

稼穡とは「農事」という意味です。

★ 大テーブルコーナー

上の大板をみてください。これは大分県出身の屯田兵で木村百次郎さんの土地にはえていた栓の大木です。直径一・五メートルもあり、倒してみるとなかに約十メートルは空洞になっていましたので、三・六メートルの



テーブル(屯田兵が残した書)

井戸側を三本とつて、その上部でこの板をとりテーブルに作ったと書いてあります。このテーブルはあまり大き過ぎて家庭ではつかえないので、役場に寄付し応接用につかっていたが、昭和三十二年（一九五七）に役場

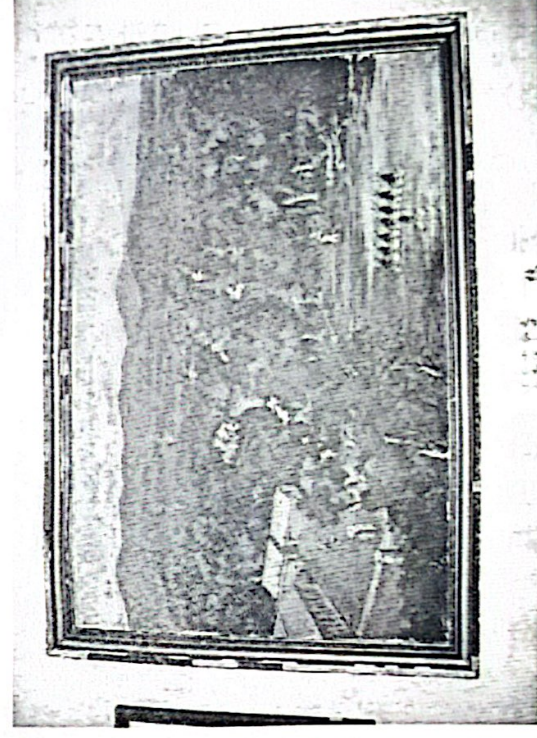
庁舎を改築し不要になったので、小使いさんが薪にしようと思い裏をみたところ、漢文がながながとつづられておりました。そこで館長（私）がよばれ、みたところ

る貴重な遺品であることがわかり、もらいうけてここに展示しました。末尾に、「後年この卓に向かって食事をする子孫のものは、先祖が屯田兵として苦心開拓した功績を決して忘れてはならない」と結んでいます。

いまは故人である北海道文化財専門委員であつた澤登龍生先生がこれをみて「屯田兵の中にこれだけの文章を書ける人がいたとは珍しいことで、この板に揮毫した文章は簡潔に開拓生活表現していて、この種の資料はほかでみることのできない貴重品である」と、激賞されたものです。

これをつくった木村さんは、書も沢山のこしていて漢詩もつくり、『東旭川五十年史』の編集者でもありまして、数少ない学識者でした。しかし、残念ながら協調性にとぼしい人で道議会議員に立候補したこともありましたが、支持者がすくなく落選してしまいました。が、惜しい人でした。

つぎの油絵は昭和九年（一九三四）役場が、絵のじょうずな青年教師榎本洲彦さんに、当時の模様を説明して描かせた練兵の絵です。兵屋の屋根がまっすぐに並んでみえますが、兵屋建築の測量はアメリカ人の技師がトラ

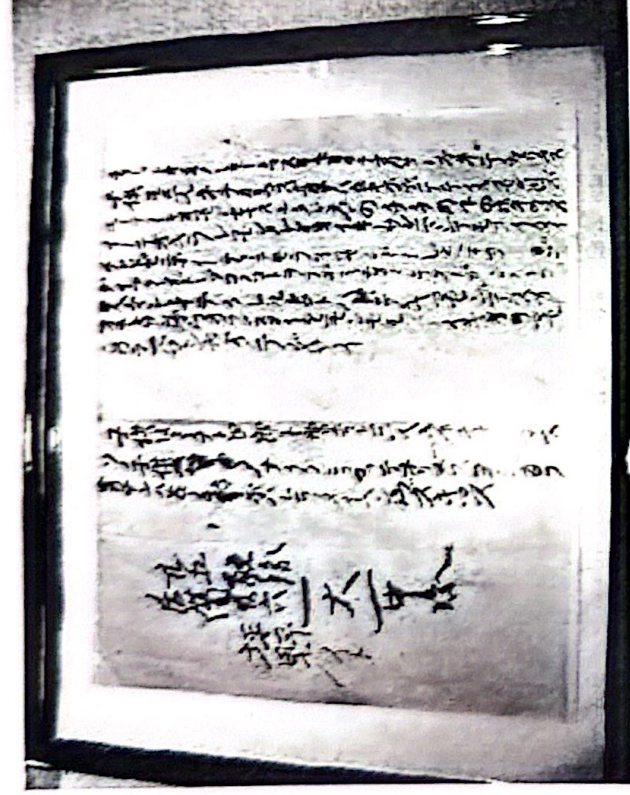


屯田兵の練兵の絵

その道をとおって一年先に入植した永山屯田兵の案内で指定番号の兵屋に落ち着いたそうです。縦横の通用道路は入地したのち、屯田兵の作業で造成されました。

つぎの写真は中隊本部で、このなかに第三、第四中隊の中隊長以下幹部が勤務し事務をとったり、屯田兵制が廃止され、不要になつて旭川市の四条通、いまの北電の事務所のところにあつた竹村病院に払いさげられて長くつかわれました。

ンシットを使って測ったもので、伐採が終わったあとでも兵屋の家並みは整然としていて、少しのくるいもなかったと言われていいます。旭川屯田兵の入地のときは、兵屋建築の測量や木材運搬に設けた刈分け道しかなく、



屯田家族の嘆願書

として京都
の本願寺に
こもって
修業して
得度をうけ
て帰りました。そして、
給与地を売
つて十勝の
鹿追町の郊
外の瓜幕と
いうところに、未開地

最後の写真は、下のケースの左端にある「日露戦争
出征軍人家族困難者一件」という中隊記録綴のなかにあ
るものです。富山県出身の屯田兵坪野源蔵さんで、六尺
豊かな大男で、日露戦争に従軍して北部朝鮮から奉天に
進撃し、ロシア兵の多くを殺傷し、その功によって
金鵒勲章をもらって凱旋しました。しかし、ときどき殺
したロシア兵の死にぎわの夢をみてうなされ、家族をの

の開拓にはいりましたが、氣候がわるくて思うように開
拓できませんでした。しかし、屈しなで小さな説教所
を開いて布教に励みました。現在は三代目の人が跡をつ
いでいて、浄教寺という立派な寺院になっています。
本堂に開山住職坪野誓源として立派な額入り写真が掲げ
られています

す。先年、末子の安子さんがお孫さん九人を連れて兵村
記念館を見学にこられ、「私は母の死水をとりましたが、
六十一歳だったのにみるかげもなく、やつれて本当にか
わいそうでした」と涙をながしながら話されました。

つぎは、屯田兵制度の育ての親と言われる永山武四郎
陸軍中將・屯田兵司令官の写真です。同司令官は第二
代北海道庁長官や旭川第七師団長にもなりました。また
貴族院議員でもありました。

同司令官は明治五年（一八七二）、開拓使の役人とな
り札幌に在勤し、屯田兵制度の創設に努力しました。ま
た明治一八年（一八八五）八月に、岩村通俊らと近文山
から国見を行い、上川（旭川）開拓の決意をしました。

なお、永山村（現旭川市永山）の村名は永山司令官の
姓によるものです。

旭川市東旭川南一条六丁目

旭川兵村記念館

一般財団法人博物館相當施設

發行所

第一版 平成九年一月三日
第十版 令和七年六月六日
菅原 巖 夫

發行日
編集者

旭川兵村記念館資料説明

資料說明